

モノサシの探し方

モノサシを探し、どう活用するかというワークショップの手法を開発するために様々な手法を試した結果、大きく分けて3つのパターンができました。

いわゆるワークショップ形式を室内で行う方法と、地域を歩くことによる「発見」や「気付き」からモノサシを探す方法。そしてイベント等々におけるアンケートや附箋記入による呼びかけ方法です。

1 テーマを決めてのワークショップ手法

テーマは「季節」、「地域の豊かさ」、「どんな地域を望むか」、「どんな社会を望むか」など地域や集団により変化させます。模造紙を広げられるスペースとペン、附箋があれば数名から開催できる手法であり、進行に多少のコツが必要ですが、特殊な技術や道具が必要なわけではなく、2時間程度から開催できます。

またSDGs目標でのマッピング(対応付け)により、より長く幅広い目標への対応も可能です。

尚、ワークショップをという言い方に抵抗がある場合、我々は「モノサシさがし」や「地域の宝物さがし」という表現をとりました。

ポイント

ワークショップアレルギーとも言える「拒否感」を解消する方法を試すとよいでしょう。

2 ツアー的な手法(地域内を歩く)

これは従来行われてきた自然観察会などの手法を、生きものだけではなく「地域の宝物さがし」などへの視点の拡大を行い、「歩く」→「発見」→「共有」→「気付き」へとつなげ、特に若年層やワークショップ形式に抵抗がある場合の参加者には有効な手段でした。

3 イベント等々での情報収集

広く浅く情報を集める場合に有効です。

我々は附箋にキーワードを記入いただく方法と、シールによる貼り付け投票の2パターンを用いました。

実施の流れ

第1段階 下調べ

対象地域を決め、まずは事前調査を行います。

その地域の抱える課題や地理的、あるいは社会的な状況をつかむために、その地域の方と一緒に地域を歩いたり、ミーティングを行います。その上でおよそそのテーマや開催時期を決めます。このミーティング参加者が地域での共同運営者となります。

ポイント

状況を大きくつかむために、人や暮らし、産業や社会基盤についてお聞きします。この段階で「モノサシ」を作るという事がどう言う意味を持つのかを丁寧に説明します。

得たい成果が共通する組織(地域主体の活動母体)がある場合などは、テーマ設定の段階できちんと調整すれば、相乗効果が得られます。

第2段階 呼びかけ

日時と場所を決め、参加者の募集を行います。

チラシの作成やウェブサイト、SNS等々での発信も行い、可能な限り多様な参加者を募ります。

ポイント

参加者層が偏らないようにジェンダーバランスなども考慮し工夫します。しかし地域により、年齢・性別・職種・地理的要因等々による一定の層があり、複雑に交差していますので、現実的には参加者の多様性に欠けることが多いです。事前打ち合わせの際によく聞き取っておいて、呼びかけを工夫することも大事です。